市民プレス

SHIMIN PRESS

4月5日　第56号

発行人　特定非営利活動法人「市民フォーラム」
編集人　原　昭二
制作　デジタル工房
E-mail　hara@camelianet.com
TEL　090（3048）5502
〒353-0004　埼玉県志木市本町 2-4-43

市民の目線で市民が発行する地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com

CONTENTS

-PAGE 1
創立20周年『志木第九の会』の快挙
演奏曲目：ヴェルディのレクイエムほか
会場：和光市民文化センター「サンアゼリア」大ホール
-PAGE 2
歴史を繙く：八王子から志木に向かって
城館群を構築した大石信濃守の謎に迫る！
-PAGE 3
足利幕府と鎌倉・太田道灌と長尾景春の乱
-PAGE 4
Global Mind：ブータン紀行　その2
深瀬 克

『志木第九の会』の快挙

「志木第九の会」は、創立二十周年を記念して、きたる六月三日(日)、和光市民文化センター『サンアゼリア』大ホールで、大曲 ヴェルディの「レクイエム」、歌劇「ナブッコ」序曲などの演奏に挑む。

「志木第九の会」の発足は、平成三年（1991）に遡る。この年市制施行二十周年の記念行事として「ベートーヴェン第九交響曲」の演奏会が開催され、このとき参加した市民合唱団の有志が母体となって結成された。

創立二十周年記念演奏会の練習が開始されたのは、一昨年二月のことであるが、予定していた会場の『サンアゼリア』が昨年三月十一日の東日本大震災によって被害を受け、公演の延期を余儀なくされていた。ようやく施設の修繕が完了したので、「記念演奏会」は、地域最大のホールで、華々しく開催の運びとなった。関係者をはじめ、地域の音楽ファンの期待は高まりつつある。

今回の演奏会は、第十五回定期演奏会を兼ね、これまで一貫して「志木第九の会」を指導し、育ててこられた三澤洋史さんが音楽監督・指揮をつとめる。曲目「レクイエム」の演奏には、震災で亡くなられた方々への敬虔な鎮魂の祈りが、また「ナブッコ」序曲と合唱の演奏には、災害で故郷を失った方々が再び希望を取り戻されるよう、心情を込めた演奏が期待されている。

音楽監督・三澤さんの指導による志木第九の会と坂戸第九を歌う会(賛助出演）との合同練習風景

曲目

■歌劇《ナブッコ》から序曲と合唱名場面集

この歌劇はバビロニア王ナブッコのエルサレム侵略（史実・バビロニアの捕囚）を描き、それにナブッコの二人の娘の愛憎劇が繰り広げられる、全4幕の大作。

序曲演奏のあと、合唱名場面集：第1幕から、冒頭の合唱と、司祭長ザッカリアとともに歌う合唱。第3幕から、ヘブライ捕囚の合唱「行け、我が思いよ、黄金の翼に乗って」がつづく。

■レクイエム

イタリアの文豪アレッサンドロ・マンゾーニの追悼のために作曲された曲で、モーツァルト、フォーレの作品とともに「三大レクイエム」に数えられる。余りにもオペラ的な、と批評されることもあるが、その基底を流れるのは、ヴェルディの素朴で真摯な信仰心である。

全体の構成、合唱と管弦楽の有機的な結合など、あらゆる面でスケールの大きな名曲だが、一方では、オペラのアリアを思わせる、美しくも、また情熱的な旋律があらわれ、特に合唱曲は、心に響く古今の名品とされている。

作曲したヴェルディは・・・

Giuseppe Fortunino Francesco Verdi (1813～1901)

撮影したのは
イタリアのカメラマン
Giacomo Brogi
(1822－1881)

19世紀を代表するロマン派音楽の作曲家で、北イタリアの小村プーセット（ボローニャ県エミリア＝ロマーニア州）で生まれた。ここは、その当時「パルマ公国」を併合した「フランス第一帝政」のタロ地区に在ったので、彼はフランス市民として誕生したのである。

ヴェルディの音楽に対する才能は、幼いころから顕著だったので、知人の援助によって、音楽の基礎を学んでいたが、音楽学校に進学するため、1832年ミラノに移り住んだ。しかし入学できなかったので、個人指導で作曲を学び、幸い音楽監督試験に合格したので、1837年には故郷に戻り、彼の才能を認めていた後援者の娘さんと結婚した。再びミラノに帰ったヴェルディは、処女作のオペラを書き、「スカラ座」で上演されるという幸運に恵まれた。ところが生まれたばかりの息子を失ない、また1840年には奥さんが病いに倒れ、ついに亡くなったので、彼は呆然とした。

年も迫ったある日、偶然ヴェルディは、街中でスカラ座支配人メレッリと会った。メレッリは彼を強引に事務所に連れてゆき、旧約聖書のナブコドノゾール王を題材にした台本を押し付けた。帰宅して開いたページの台詞「行け、わが思いよ、黄金の翼に乗って (Va, pensiero, sull'ali dorate)」が眼に入り、やる気の無かったヴェルディは音楽への意欲を取り戻したのである。

1842年スカラ座で初演を迎えたこの曲に、観客は惜しみない賞賛を贈り、「黄金の翼」の合唱では、当時禁止されていたアンコールを要求した。オペら「ナブッコ」は大成功を収め、ヴェルディの名声は不動のものとなった。

当時イタリアの国土はまだ統一されていなかったので、聴衆は国家主義的な激情にかられて熱狂したといわれ、「行け、我が想いよ」は第2のイタリア国歌とまでいわれるようになった。しかし最近になって、アンコールは事実としても、これは「行け、我が想いよ」ではなく、ヘブライ人奴隷が同胞の救いを神に感謝して歌う「賛美歌」を求めたものと解釈され、ヴェルディをイタリア統一運動の中で音楽を通して先導したという見方は強調されなくなっている。

侵攻したフランスのナポレオンが1815年に失脚して、イタリアは元の分裂状態に戻ったが、1861年、ジュゼッペ・ガルバルディらの協力を受けたサルディーニャ王ヴィットーリオ・エマニュエーレ2世が統一に成功して「イタリア王国」は樹立された。

ヴェルディのオペラ作品は数多いが、代表作として『リゴレット』、『椿姫』、『アイーダ』などがあり、世界の音楽ファンを湧かせ、大きな喝采を浴びている。

1894年にはフランス語版『オテロ』がオペラ座で公演され、フランス大統領から二度目のレジオンドヌール勲章を受けた。八十才を越えてもまだ精力的に見えたが、引退を決意し、音楽ではない別の仕事に取り組んだ。

かねてから計画していた音楽家のための老人ホームの建設である。「憩いの家」Casa di Riposo per Musicisti は私財によってミラノに着工され、彼の死後に竣工した。1902年には施設の利用がはじまり、その運営は現在に至るまで継続している。

引退した指揮者、ピアニスト、バイオリニスト、バレリーナなど、約五十人もの音楽家が、いまも平穏にここで暮らしているという。改めてヴェルディの人となりと偉大さに感銘するのである。

第12回（前々回）定期演奏会のステージから　2007年2月4日
音楽監督・指揮：三澤洋史
東京ニューシティ管弦楽団
ベートーヴェン：第九交響曲

引退した音楽家のための「憩いの家」
手前に建つのは「ヴェルディの彫像」

２０１２年６月３日（日）
開場14：１５　開演１５：００
和光市民文化センター「サンアゼリア」大ホール
共催：（財）和光市文化振興公社
入場料：２５００円（全席自由）

問い合わせ『志木第九の会事務局』
〒３５３-０００１
志木市上宗岡１-１４-１-１０６
岡嶋方
TEL/FAX 048-473-6368
http：//www2u.biglobe.ne.jp/~freude/

曲　目：ジュゼッペ・ヴェルディ作曲
■歌劇《ナブッコ》
序曲
合唱名場面集（第１幕・第３幕より）
■レクイエム
ソプラノ：黒澤 明子
メゾソプラノ：山下 牧子
テノール：樋口 達哉
バス：タン・ジュンボ
音楽監督・指揮：三澤 洋史
管弦楽：東京ニューシティ管弦楽団
合唱：志木第九の会
坂戸第九を歌う会（賛助出演）

八王子から志木に向かって城館群を構築した

大石信濃守の謎に迫る！

残された系図によれば・・・

大石氏は、信濃藤原氏の後裔と伝えられる。系図の一部の信憑性に疑いがもたれているが、木曽義仲を祖先として信濃国佐久郡大石郷に住んだことから、大石氏を名乗ったようだ。大石氏は本拠の信濃から次第に武蔵へと移って、七代信重は関東管領山内上杉憲顕（のりあき）に仕えた。延文元年（１３５６）戦功によって入間・多摩両郡の柳瀬川流域を含む十三郷を与えられた。武蔵国の目代（もくだい）（国の行政官の代理国司）に任命され、また至徳元年（１３８４）には浄福寺城（現・八王子市下恩方町）を築城したとも伝えられている。系図では、石見守憲重（のりしげ）、憲儀（のりよし）、十代目の房重（ふさしげ）につづく十一代の当主が信濃守顕重となる。

館の所在地を巡って・・・

本紙では、道興を招いた武蔵国の守護代大石顕重の館は、その場所を志木市の柏ノ城としてこれまでストーリーを進めてきた。

しかし、有力な豪族だった信濃大石家は、山内上杉氏の重臣として、東京西部から埼玉県の南部にかけていくつもの城館を築いており、顕重の主たる城館は現・八王子市一帯に所在し、志木市の柏ノ城は彼の支城だったようだ。

したがって、道興を招いた舞台は当時彼が居館として構えた高月城（高槻とも書く）に違いないとする説があって、城郭研究の定本とされる『日本城郭大系』（新人物往来社、１９８０年刊）もこれに従っている。

顕重の本拠は高月にあった

高月城は、標高１５０ｍ余り、比高４０ｍ、秋川の断崖に建ち、東は多摩川によって守られ、長禄二年（１４５８）に築かれたと伝えられる。

また大石氏の城館として、顕重の嫡男、定重（さだしげ）によって大永元年（１５２１）に築かれた滝山城があり、大石氏の主城は、ここに移転されたという。なお道興が大石氏に招かれたころ、江戸城に滞在していた万里集九という詩僧が、定重の人となりを記しているが、顕重の嫡男は活動的な人物だったようだ（なお万里集九の人物像と定重との間柄については、次号で詳しく述べる予定）。

主城は滝山城に移る・・・

滝山城は高月城跡の南東、多摩川に沿い、標高１７０ｍ、比高８０ｍの要害に所在する。その南側には加住丘陵が広がり、一帯は雑木林に覆われていて、規模が大きい。そのため滝山城を構えたのち、高月城はその支城として機能していたと考えられる。しかしのちに何れも北条氏によって攻め落とされ、大規模な改築が行なわれた。そのためいまに残された両城の跡地には、残念ながら、大石氏が築城したころの趣きは殆んどない。

北条氏が改築した高月城と滝山城は・・・

大石氏の城館を奪取した北条氏は、複雑な地形を巧みに利用して改築した。そこで加住丘陵の崖線に位置する滝山城は、関東随一の規模を誇るものになった。滝山城跡地の保存状態はきわめて良好で、国の史跡に指定されており、八王子市は、大石氏・北条氏の城館跡地として整備し、公開している。

加住丘陵の中央部分につくられた都立滝山公園は、春になると、５０００本もの桜が薄紅色の花を開いて丘陵斜面を覆うので、丘陵の東南方面から滝山城址を目指して歩く、桜群生林を散策するルートは人気がある。

廻国雑記で記された舞台を八王子と仮定すると・・・

道興が長旅の旅装を解いて越年し、武蔵野の名所・旧跡を訪ね、大石信濃守の館に招かれたという「大塚十玉坊」からの道筋はどうだったのだろうか、気になるところである。しかしいままで八王子の城館との位置関係について、史家の議論は触れられず、その所在地について、「大塚」の地名を重視して、現・川越市の南大塚とされたこともある。もちろんそこにも建物跡らしきものは見付かっていない。道興は大塚の十玉坊を拠点として、少なくても三回、大石の館を訪れており、それも気ままに赴いた感触が拭えない。その道程は近かったのではあるまいか。

最近になって、それが埼玉県志木市の西部、柏町・幸町あたりに在った「大塚村」とする説が有力になってきた。

「大塚の十玉坊」は志木市の西部に在ったようだ

第一の手掛かりとして、現・志木市郷土資料館に残された「長勝院の版鐘」がある。志木市・柏の城跡地の一角に残されていたお寺に懸けられていたもので、その銘文中には、施主九人の住居地として「大塚村」の地名が記されている。志木市内には、かつて大塚村が所在したことは明らかなようだ。

そして現・幸町に住む綱島家は「ホーイン（法印）さん」と呼ばれ、墓石からも修験との関わりが読み取られるという。また、その地に「ゴボウ下」「ジゴク谷」と呼ばれる場所があり、「ゴボウ」は御坊、「ジゴク」は十玉を指しており、周辺から修験に関する「碑伝（ひでん）」が出土した。

志木市文化財保護委員会の会長をつとめる神山健吉氏は、本紙第21号にこの「大塚十玉坊」説を詳しく紹介している。

大石氏の家系と道興との繋がりは・・・

「大石家系図」によれば、顕重の伯母多萬方（たまのかた）の母親は十玉坊の娘で、彼女は道興ゆかりの近衛家に嫁いでいたという。

道興がいつもより長く逗留し、何度も大石信濃守の館を訪れた背景としての人脈が偲ばれる。ただし厳寒の時候を避けるためだったという単純な理由によるのかもしれないので、断定することは危険である。

秋川と多摩川の合流する地点に当る加住丘陵からは・・・

遥かに武蔵野台地を遠望でき、道興は、この崖上に築かれた大石氏の館からの眺めを愛で、七言絶句（定型の七言四句）の詩文に詠んだと推測されて、定説になっていた時代がある。

『廻国雑記』から・・・

ある時大石信濃守といへる武士の館に、ゆかり侍りて、まかりてあそび侍るに、庭前に高閣あり。矢倉などを相かねて侍りけるにや。遠景すぐれて、数千里の江山眼の前に尽きぬとおもほゆ。あるじ盃を取り出して、暮過るまで遊覧しけるに、

一閑興に乗じ屢（しばしば）楼に登る
遠近の江山幾州を分（わか）つ
落鴈霜に叫び風颯々（さつさつ）
白沙翠竹斜陽幽（かすか）なり

しかし、この句で詠まれた「遠近の山河が幾つもの国を区切っている様子が見える」という眺めは、おそらく丹沢や奥多摩や奥秩父、さらに遠く筑波や上州の山まで見えたのではないだろうか。だが、ここから展望するとき、

方角が合致しないのでは！

いまに残された高月城址の主郭跡は畑地となっているが、周囲は樹林に取り巻かれ、背後には加住丘陵を望み、北方は多摩の山並みと向かい合う。時代の変遷を考慮しても、道興の詠った遠望には当らないように思われる。

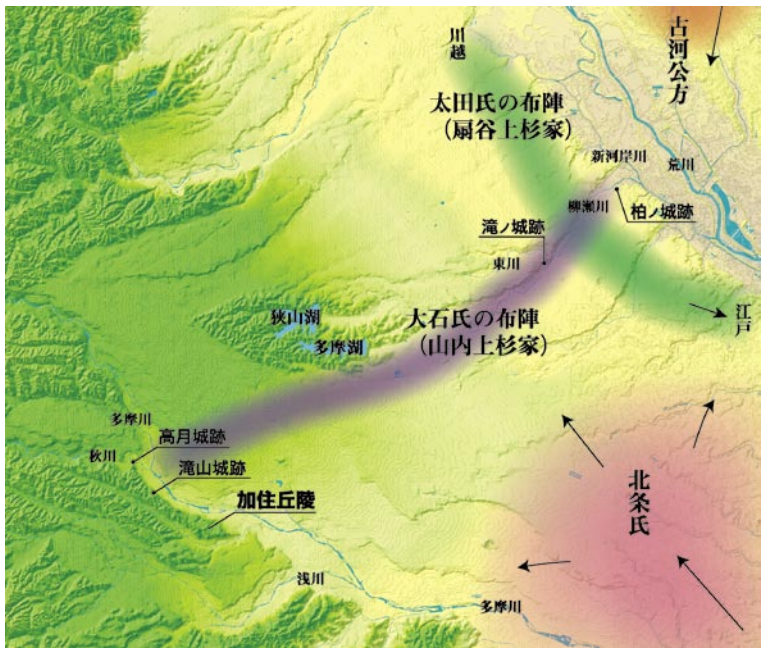
一方、周囲一帯が住宅地となったので、かつての展望を蘇らせることは不可能だが、志木市の柏ノ城跡からの眺めは、詩歌に詠われた方向になる。

ただし大石氏は八王子市の主たる城郭と柏城との中間に当る、現・所沢市の柳瀬川に沿った崖線に「瀧の城」を築いたと伝えられる。いまに残された跡地からの眺望も、詩歌に合致する方向になる。そこで道興が招かれた大石氏の館は、志木市の柏ノ城ではなく、ここではないかと推測する向きもある（萩元家義「志木市郷土誌」＜創刊号／１９７２＞）。

いずれにせよ、大石氏は八王子の主城群から所沢の「瀧の城」を経て「柳瀬川」の流域に沿い、ついには志木の支城「柏ノ城」にいたる、長い防衛線を築いたようだ。ではその守りは一体誰に向かっていたのだろう。

大石氏の城館群は西から東へ

八王子から所沢を経て志木へと、広域に展開された大石氏の備えは、何を防御するためだったのか。鎌倉を目指して南下を目指す、北方の古河公方（くぼう）、また南方から力をもって迫り来る北条氏、北条早雲の攻勢に備え、しかも川越城から江戸城へと南北に展開された太田氏（扇谷上杉氏の家宰）と対峙する大石氏（山内上杉氏の重臣）が構えた、必死の戦略だったと考えられるのである。



大石顕重・定重は、多摩川に臨んだ加住丘陵の崖線に「高月城」と「滝山城」を築いたが、さらに柳瀬川に沿って武蔵野台地を下り、支城として瀧ノ城（所沢市）、柏ノ城（志木市）を構築して、太田道灌が展開した川越～江戸の布陣、南下する古河公方、北方を狙う北条氏と交錯する守りを固めた。

歴史を繙く

足利氏が京都に幕府を開いてからも、以前からの東国の政治的中心、鎌倉の重要性は不変であった。

足利尊氏の四男、基氏は南朝／正平四年、北朝／貞和五年（1349）初代の鎌倉公方となり、その居所は小幕府としての体裁を整えた。

公方は鎌倉における将軍を意味し、これを補佐する関東管領が任命されたが、この職は足利氏と姻戚関係にある上杉氏に固定されてゆき、武蔵国守護職（軍事指揮・行政官）にも上杉氏が任命されて、鎌倉は室町幕府から委任された幕府の機能をもつようになったのである。

しかし十五世紀に入って・・・

関東の地は動乱の巷となり、関東管領家として繁栄し、鎌倉に居住していた上杉氏一族は分派し、それぞれの居住地の名をもって、犬懸、山内、宅間、扇谷上杉氏と呼ばれていた。優位に立ったのは山内上杉家で、これを追う扇谷上杉家の対抗と相互の断絶、そして妥協が繰り返された。

養子として山内上杉家を継いだ上杉憲実は、永享十年（1438）六代将軍足利義教の命によって、四代鎌倉公方の足利持氏を討伐（永享の乱）、一方将軍義教は、嘉吉元年（1441）播磨の守護赤松満祐によって暗殺され（嘉吉の変）、室町幕府には、鎌倉府の立て直しに取組む機運が生じたようだ。

鎌倉府の再興

五代鎌倉公方には持氏の子、成氏が就任し、その補佐役の関東管領には、山内上杉家の上杉憲忠（上杉憲実の嫡男）が就任した。しかし鎌倉府が再興されても、成氏の元に集まった旧持氏方の武将・豪族等と、山内・扇谷両上杉氏との緊張関係は改善されなかった。

享徳の乱

宝徳二年（1450）、山内上杉家家宰の長尾景仲と、その婿で扇谷上杉家家宰だった太田資清（法号は道真）は鎌倉の御所を襲撃した。成氏は鎌倉から江の島に避難し、千葉氏、宇都宮氏らの活躍によって難を逃れ、長尾・太田連合軍は退いた。

享徳三年（1455）、鎌倉公方の成氏は、関東管領上杉憲忠を御所に呼び寄せて謀殺した。父を死に追いやった上杉氏への恨みが原因とも、また鎌倉府内部の対立が要因ともいわれている。そこで山内上杉家は、憲忠の弟・房顕を憲忠の後継として体制の立て直しを図った。

翌享徳四年、成氏は上杉氏の本国である上野を攻略するために鎌倉を出発して武蔵国府中の高安寺に入った。一方長尾景仲は直ちに上野・武蔵の兵を率いて府中に向けて出撃し、上杉一族もこれに合流すべく出陣した。しかし成氏軍の突撃に不意を突かれた上杉軍は混乱し、緒戦で上杉軍先鋒の大石房重らが討たれた（分倍河原の戦い）。この人が大石氏十一代信濃守濃顕重の父である。

幕府が上杉氏の支援を決定し、天皇から討伐の御旗が与えられた。そこで朝敵となった成氏は現・足利市に布陣して対抗し、その後は下総古河を本拠地としたので、古河公方（初代）と呼ばれることになる。以後、関東一帯は戦いの乱世に導かれた。

太田氏父子による築城

武蔵国は上杉氏と古河公方（足利氏）との係争地となり、そのため足利氏の勢力であった古河城や関宿城・忍城などと対峙する上杉氏は、本拠地を構築する必要に迫られた。

そこで守護大名、扇谷上杉家当主、上杉持朝は、長禄元年（1457）、家宰の太田資清・資長（法号を道灌）父子に対して川越城の築城を命じ、また江戸城をも築城させて、古河公方への防衛線を強化した。山内上杉氏の執事だった長尾景仲とは互いに牽制し合っていたが、一方、関東管領山内上杉家の大石氏・顕重は、長禄二年高月城を築き、本拠の山城、浄福寺城から移った。

道灌山に近いJR日暮里駅前の広場に建つ太田道灌像

上野、武蔵、伊豆の守護代の大石氏は、本拠を武蔵国多摩郡に定めて、地域領主としての基盤を固め、多摩地域を出て、武蔵国中央南部に進出した。しばしば扇谷山内家陣営にも加担しつつ、川越城と江戸城を結ぶ線を構築して活動する太田道灌に対抗し、これと交叉する城郭を築くことによって防備を固めたようだ。

大石顕重は一族を率いて活動した

文明三年（1471）、上杉勢は成氏の居城古河を攻め、各地で公方方の城を攻略したが、大石氏はそれらの攻撃に参加して将軍足利義政から感状を受けた。

都では「応仁の乱」が起る・・・

足利家の内訌（内部の乱れ）は激しさを増し、応仁元年（1467）に勃発した内乱は、文明九年（1477）まで、十一年もつづいて、都のほぼ全域を焼け野の原と化してしまった（応仁の乱）。

つづく明応の政変（明応二年＜1493＞）以後、世は「戦国時代」へと移ったのである。

関東では長尾景春の乱が・・・

白井長尾氏は利根川沿いに白井城（現・渋川市）を構え、景仲・景信の二代にわたって山内上杉家の家宰と武蔵・上野の守護代をつとめ、所領も多かった。しかも在地の武士を組織して、屈指の勢力を築いていた。景信が死去したあと、子の景春が家督を継いだが、遺憾ながら彼には家宰職が与えられなかった。これを恨んだ景春は、従兄弟の太田道灌に同心を求めた。しかし拒否されたため文明八年（1476）居城を去り、荒川に臨む断崖に鉢形城を築き、山内家当主、上杉顕定に反旗を翻した。

景春は優れた武勇の士と伝えられ、翌文明九年の正月には五十子陣（現・本庄市）の顕定軍を破って、彼の勢力を上野にまで放逐することに成功した。

古河公方に対する防御拠点が落とされたため上杉方は動揺し、相模に小磯城（現・大磯町）を構えていた越後五郎四郎、小沢城（現・神奈川県愛川町）の金子掃部助、溝呂木城（現・厚木市）の溝呂木正重、そして小机城（現・横浜市）の矢野兵庫が長尾景春に呼応した。また多くの地侍も味方した。

しかも石神井城と練馬城（現・練馬区）の城主、豊島泰経、また平塚城（現・北区）の主じだった弟の豊島泰明も景春を援護して、太田氏の川越～江戸の防御線を断ち切った。

太田道灌は関東一円を制圧

長尾氏に与する各地の城主に対抗して攻めに転じた道灌は、兵を動かして溝呂木城・小沢城（現・神奈川県に所在）を速攻、これらを落とし、さらに、川越城の攻撃を図っていた矢野兵庫（小机城＜現・横浜市＞）を甥の資忠らによって撃退させた。

つづいて道灌は、豊島氏の居城であった平塚城を焼き払い、追撃して来た泰経、泰明を追った。江古田・沼袋の戦いで泰明を打ち取り、石神井城を落城させた。

文明九年四月、長尾景春は五十子を出陣して利根川を渡り、山内上杉家顕定、扇谷上杉家定正の軍を攻めたが撃退され、道灌は顕定・定正と合流して五十子を奪回、用土原の戦いで景春を撃破した。

武蔵、相模の諸城を制圧した道灌は、古河公方、足利成氏との和議に反対していた成氏方の有力武将の千葉孝胤を境根原（現・柏市）で破り、ついで甥の資忠らを房総半島に派遣して、千葉氏の臼井城（現・佐倉市）を攻め落した。この戦いで資忠は戦死するが、真里谷城と長南城の上総武田氏、海上城の海上氏を降し、房総半島から反対勢力を一掃することに成功したのである。

川越市役所の前に建つ太田道灌像

抵抗を続けていた長尾景春は、文明十二年（1480）、最後の拠点である日野城（現・秩父市）を道灌に攻め落とされ、没落を余儀なくされる。そして文明十四年、古河公方の成氏と両上杉家との間で「都鄙合体」（都鄙とは、都と田舎）と呼ばれる和議が成立して享徳の乱は終結した。

太田道灌暗殺される

道灌の活躍によって主家扇谷家の勢力は大きく増したが、道灌の威望も絶大なものになっていた。

文明十八年（1486）七月、扇谷定正の糟屋館（現・伊勢原市）に招かれた道灌は、ここで暗殺される。入浴後に風呂場の小口から出たところを曽我兵庫に襲われ、斬り倒された。死に際に「当方滅亡」と言い残したという。自分がいなくなれば扇谷上杉家に未来はないという予言である。享年五十五才。

道灌の抹殺は、江戸・河越両城の補修を怪しんで、扇谷家中が定正に対して讒言したことによるものとされているが、これらの中傷に対して道灌は弁明しなかったという。

ただし「太田道灌状」（文明十二年に道灌が山内上杉氏の家臣高瀬民部少輔に送った書状で、長尾景春の乱での活躍について三十九ヶ条にわたって記されている）には、道灌の功績を正当に評価しない主家に対する彼の不満と奇立ちがこめられていた。

道灌暗殺により、道灌の子・資康をはじめとして、扇谷上杉家に付いていた国人や地侍の多くが山内家側へ去った。

道興准后の廻国の旅も終わるころ・・・

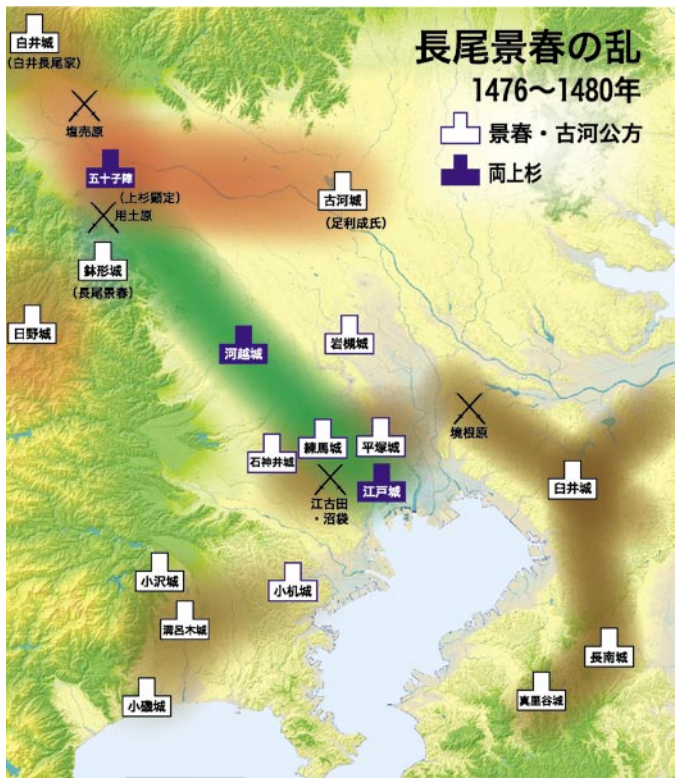
山内上杉家・顕定と扇谷上杉家・定正との対立は激化し、長享元年（1487）、長享の乱が起こる。翌年、山内・扇谷両上杉の軍勢は実蒔原（現・伊勢原市）・須賀谷原（現・埼玉県嵐山町）・高見原（現・同小川町、現在は寄居町の鷹野原を含む）で激突（俗に「長享三戦」と呼ばれている）、いずれも扇谷上杉陣営の勝利に終わったが、道灌誅殺後の軍民の離反は続いていた。

山内上杉陣営の顕定は後方に越後・上野国両国を有していたので、その支援によって鉢形城を保ち続け、抗争が長期化するにつれて顕定は次第に有利に立つようになった。

明応三年（1494）、扇谷定正は高見原に出陣して山内顕定と対陣したが、荒川を渡河しようとした際に落馬して死去。享年四十九才。定正の没後は甥・朝良に引き継がれた。

しかしこの争いが災いして両上杉氏は衰退しはじめ、駿河今川氏の客将・伊勢宗瑞（北条早雲）の関東進出を許す結果となったのである。

早雲の孫の氏康によって扇谷家は滅ぼされ、山内家も関東を追われることになる。



Global Mind の「地球市民」

国際的にも、また国内でも、ブータンの前国王が提唱されたGNH(Gross National Happiness)「国民総幸福」という指標は、これから非常に重要なものに成るだろう、いままでGNP(Gross National Product)国民総生産という指標は、世界中で親しまれ、わが国はかつて世界の二位（2011年中国と入れ替わり三位）にあることを誇っていたが。

ブータン紀行

2011年9月17～26日

ブータンを訪ねて人々に直接触れられた記録　その二

深瀬　克

1。現世よりも来世

日本の仏教は、4世紀から6世紀の初めにインドから中国に伝わった大乗仏教が、百済を経由して6世紀中頃に伝わってきたといわれている。一方ブータンの人たちが信ずる仏教は、日本と同じ大乗仏教ではあるが、インドでヒンズー教と習合した後期仏教が8～9世紀にチベットに伝わったものであって、堂内や仏像が金ピカ極彩色で、土着のボン教とも習合して呪術（まじない）的でもある。

もっとも特徴的なことは、彼らが「輪廻転生」、すなわち来世への生まれ変わりを信じていることである。人は死ぬと閻魔様の前に引き出され、生前の行ないについて評価を受ける。そこには天秤計りが置いてあって、教えに対して良い行ないには白石、悪い行ないには黒石が載せられ、その結果によって、人間に生まれ変われるか、それとも獣や虫たちになるか、最悪地獄に落とされるのか、六道の行く先が決められると信じているのである。従って彼らの最大関心事は、この世で良い生活を楽しむことよりも、むしろ来世でどうなるかなのである。

寺院の中の子ども部屋

お寺に行くと、彼らは、ご本尊や諸仏の前で「五体投地」を行なうが、その前に合掌した手を「額・口・胸」に当てる。現地ガイドによると、これは邪（よこし）まな思い・嘘や悪口・殺生などの悪い行ないをしないように、「思いと言葉と行ない」を正すために祈っているのだそうだ。彼らの生活の中には戒律があり、庶民はもちろん、ほとんどの坊さんにも戒律が存在しない、あまりに自由な国である日本とは違う。ブータンでは戒律を守ることが幸せな来世に繋がるのだ。そして祈る内容も、自分のことだけでなく、家族や周囲の人々、そして人類や動植物や大自然が平安であることを祈っているのだそうだ。振り返ってわれわれ日本人が神社仏閣で手を合わせて祈るのは、「家内安全」・「商売繁盛」・「病気退散」・「進学就職」・「結婚子宝」などの自分または家族の現世利益を求めたものなのではないだろうか。それに対してブータンでは、自分のことばかり祈っていると、黒石を積み上げることになるそうだ。

「祈祷旗」ルンタが張り巡らされた森

彼らにとってもっとも大切な戒律は「殺生しないこと」である。手に止まった蚊をパチンと叩き潰すと、彼らはビクッとした。肉類は原則的には食べないのだが、ヤクの肉などは食べている。ヤクを殺して食べても良いのかと現地ガイドに質（ただ）すと、『一匹殺すことによって多くの人たちが喜んで食べることが出来るから』と言うではないか。ブータン人は一番大切な戒律であっても現実に合わせて、柔軟かつ都合よく解釈して対応しているようだ。原理主義によって硬直化しない、ご都合主義ともいえる柔軟な考え方には思わず吹きだしてしまった。

2。少欲知足

さて、話を元に戻そう。来世への関心が強いブータン人は、外国からの情報や物品が少なかったことと相まって、「少欲知足」の気持ちにごく自然になっているように見えた。このことも、「国民総幸福」を追求することが国是（こくぜ）になる大きな前提条件なのであろう。

村はずれにある「仏塔」と「経文旗」

ブータンでは家の中心部分に仏間があり、仏像や仏画や電飾までしつらえた家もあった。家の周囲には「お寺」のほかに「仏塔（チョルテン）」、「念仏車（マニ）」、縦長の「経文旗（ダルシン）」、「祈祷旗（ルンタ）」と呼ばれる小旗を長く連ねたものなど、チベット仏教に関連したものがあらゆる場所で目に付く。まさに身近に仏教が充満している。精神的にも形の上でも仏教が生活の中心にある。

マニ車を回しながらお寺の周囲を廻る村人たち

「念仏車」は中にお経が入っていて、一回回転させるとお経を一回読んだことになるのだそうだ。回転筒の上部に棒が突出しており、一回転ごとにそばに吊るした小さな鐘を叩く仕掛けになっているものもある。マニ車は手で廻すものだけでなく、水車と同じ原理で四六時中回りっぱなしのものもある。夜の帳（とばり）の中、一晩中一定の間隔を置いて「チン、チン・・・」と鐘の音が聞こえてくるので、まるで浄土に来たような感覚であった。

「経文旗」や「祈祷旗」には経文が印刷されている。家の周囲や峠や高台、更には何かしら霊が留まっていそうな気味の悪い所にたくさんあり、魔除けの役割もあるようだ。これが風にはためくと、印刷してある経文を一回読んだことになるのだそうで、マニ車と同様、実に都合よく作られている。

3。「合体仏」・「ポー」

チベット仏教でもう一つ特徴的なことは、男女の仏の「合体仏」が祀られていることだ。合体している部分を、思わず覗き込んでしまう自分であるが、お寺の内部は全て撮影禁止だったので、残念ながら写真は無い。撮影禁止の理由は、「写真を撮られると仏像がもっている神通力が吸い取られてしまうから」とのことだった。合体仏は何を意味するのか現地ガイドに聞いたところ、男性は強い力、女性は叡智をもち、これが合体することによって最強の解脱（げだつ）に到るのだと言う。日本でも同じような考え方の仏教、「立川流」が鎌倉時代に興り、男女合体の境地を即身成仏の境地としたが、やがて淫らな邪教として禁止され、江戸時代には消滅したようだ。露骨過ぎて日本の精神文化には合いにくかったのであろう。

もう一つわれわれの感覚とかけはなれたものとして「ポー（男根）」があった。「魔除け」の意味や「子々孫々の繁栄」を祈って家の外壁にポーの絵を描いたり、軒先に木製のポーを吊るしてあった。巨大なポーは、この家にはこんな大男がいるということを誇示し、魔よけにしたらしい。私が現地ガイドに、「こんな絵を見て変な気を起すのでは」と聞いたら、『魔除けなのだからそんな気は起こらない。それよりも日本では銭湯に大勢が素っ裸で一緒に入るが、ブータンでは考えられないとんでもないことだ』とのことだった。風俗習慣の相違は、理屈では説明できない。

雑貨屋の入口に描かれた「ポー」

「魔除けの絵」は最近は減ってきているそうだ。日本では明治維新後、文明開化と共に「混浴」が急激に減少し、現在ではほとんど無くなっているが、ブータンは伝統を大切にする国なので、このような奇習も是非保存して欲しいものだ。

（2012.2.11）

付記

旅行中、北インドでM6.9の大地震があり、ブータン国内でも大きな被害があった。早速、現国王と前国王は手分けして、国内を視察して廻った。幹線道路が少ないので、我々は国王の乗った車に遭うことができた。何と国王は、やってきた車の助手席に座って、手を振るわれわれに対して、にこやかに手を振ってくれた。国民と国王の距離が近いことを実感した瞬間であった。

以上二回にわたり、ブータンを「自然と伝統文化」・「チベット仏教」・「国王」と言った切り口から見てきたが、共通して言えることは、ブータン人は「物質面よりも精神面、経済性よりも自然や伝統を重視」しており、「国民総幸福（GNH）」を支持する基盤はここにあると思った。

ティンプー郊外で村長さんの奥さんと並んだ記念写真

特定非営利活動法人
NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。
読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

TEL 090（3048）5502
編集部原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回（二、四、七、十月、各五日）発行。